辻屋遺跡

- 平成30年度 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



2019

茅野市教育委員会

辻屋遺跡

- 平成30年度 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2019

茅野市教育委員会

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。 東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊 を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むことができます。

当市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡や駒形遺跡をは じめとする多くの縄文時代の遺跡があるだけでなく、「縄文の ビーナス」や「仮面の女神」の愛称で親しまれている国宝に指 定されている土偶を保有しています。こうしたことから、「縄文 の里」として全国にその名を知られています。

当市では市内各所で行われる各種開発事業と、遺跡の保護について調整を図ってきました。本報告書には、平成30年度に受託事業として実施した辻屋遺跡の調査成果がまとめられています。

報告する辻屋遺跡は、これまで名前こそ知られていたものの、その実態は全く不明の遺跡でした。この地に宅地造成が計画され、試掘調査を経て今回の発掘調査となりましたが、短い期間ながら多くの成果を得ることができました。本報告書が茅野市の考古学研究に寄与することを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力を賜りました株式会社篠原不動産、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

茅野市教育委員会 教育長 山田利幸

例 言

- 1 本書は平成30年度に実施した宅地造成工事に伴う長野県茅野市湖東所在の辻屋遺跡に係る発掘調査報告書である。本調査は、宅地造成を計画する篠原不動産からの発掘調査の委託を受け、茅野市教育委員会が実施した受託事業である。
- 2 本遺跡は、平成30年4月17日から平成30年4月22日まで調査した。
- 3 挿図中の遺構の標高は、土地造成工事に先立つ測量会社による図を基に、道路上のマンホールの標高 950.111 mを基準とした。
- 4 遺構平面図は平板測量で行った。挿図の方位は磁北である。
- 5 整理作業ならびに報告書作成は、平成30年4月4日から平成31年3月25日に実施した。
- 6 本調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。報文中に使用したドローン による空中写真は、山田善興氏の撮影によるものである。

凡 例

- 1 本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。
- 2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。

○土器、▲石器・石製品、トレ=トレンチ、住居址内 P1 等=柱穴及び貯蔵穴

調査の体制

発掘調査は茅野市教育委員会事務局 文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。

調査主体者 教育長 山田利幸

事 務 局 生涯学習部長 平出信次

文化財課・尖石縄文考古館

両角勝元 (文化財課長)

守矢昌文(尖石縄文考古館長)

小池岳史(考古館係長)

小林健治(文化財係長)

山科 哲 大月三千代 小林深志 鵜飼幸雄

- ④ 調査担当 小林深志 鵜飼幸雄
- ⑤ 発掘調査参加者

補助員 酒井みさを 大勝弘子 武居八千代 立岩貴江子 作業員 赤羽千雲 北澤俊弘 柳沢省一 山田善興

目 次

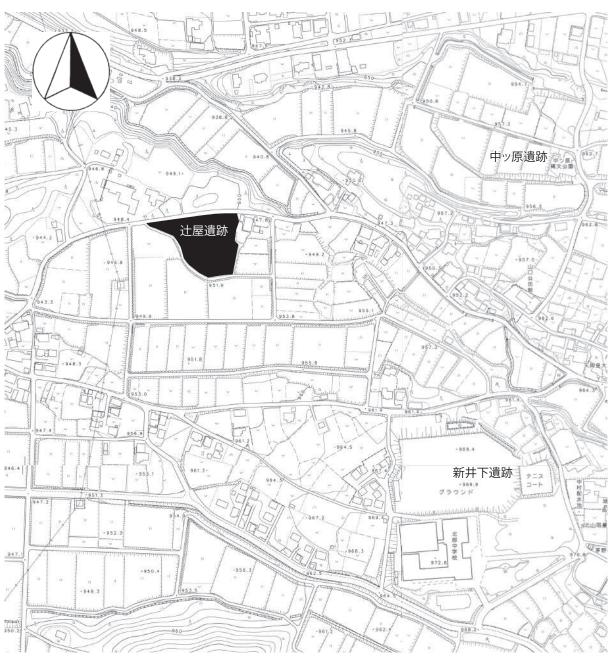
第1章	遺跡の位置と環境	1
第2章	調査の経過	2
第3章	遺構と遺物	4
第4章	まとめ	25
抄録		

第1章 遺跡の位置と環境

辻屋遺跡は茅野駅から 6.5km北東にあり、ビーナスラインからは南へ 200 m、国道 152 号・299 号からは北へ 700 mの距離にある。茅野市湖東の中村集落と山口集落の間にあり、北側に山口と中村の 2 つの集落を繋ぐ 道路があるが、交通量はそれほど多くない。湖東小学校や北部中学校が近いところにあることから、今後の発展が期待されるところである。

辻屋遺跡は上川の支流となる山口沢川に面した台地の北端に位置している。遺跡の地点で分岐する山口沢川の 支流上約 400 mの位置に国宝土偶「仮面の女神」が出土した中ッ原遺跡、同じ台地上で山口沢川上流となる南東 約 500m の位置に新井下遺跡がある。辻屋遺跡は、こうした茅野市でも拠点集落と考えられる遺跡に挟まれてい る小規模な遺跡である。

遺跡の南側は圃場整備が行われ水田地帯となっており、遺跡のあるところだけが小山状で山林として残されて



第1図 辻屋遺跡の位置 (1/5,000)

いた。北側の道路から 4 mほどの比高差がある。周囲には豊富な湧水が多く、今でも山口沢川に沿って湧出する数カ所の湧水を見ることができる。

辻屋遺跡は、『茅野市史 上巻』に「湖東中村にあり、縄文時代前期の土器片と、石鏃・打製石斧・磨製石斧・ 四石が出土した。」と1行記載されているのみである。これまで山林であったため、表面採集も行うことができず、 詳細は分かっていなかった。

参考文献

茅野市 1986 『茅野市史―上巻―』

第2章 調査の経緯

試掘調査

この地に宅地造成が計画された。そこで現地に行ってみると、すでに樹木の伐採がなされた状態であった。伐 採時に重機によって多少表面がかき回された状態であったので、表面採集を試みたところ、縄文時代前期後半の 土器片と、特殊磨石を採集することができた。

そこで、開発業者と協議を行い、試掘調査を行い、その結果を受けて改めて遺跡の保護について協議を行うこととした。

試掘調査は、平成29年9月13日より15日までの3日間実施した。調査対象面積が約4,944㎡と広いため、 試掘調査はトレンチによる方法で実施した。トレンチは約2m幅で地形にそって全部で19本あけることができた。 トレンチの名称は、北側の道沿いのトレンチを1号トレンチとし、反時計回りに19号トレンチまでとした。

試掘調査では、縄文時代の住居址3軒と土坑1基を検出した。試掘調査を行った面積は約773㎡である。この 試掘調査の結果については、すでに報告済みである。

この試掘調査の結果を受け、開発者と遺跡の保護について協議を行ったが、当地が小山状となっており、北側の道路から4mほど高いため、ほとんどが掘削になる計画を変えることができなかった。そこで、遺構の検出された箇所について発掘調査を行うこととなったが、当時行っていたツキノ木遺跡の発掘調査の後にも別の遺跡の発掘調査が予定されていたことから、本遺跡の発掘調査は平成30年度の早い段階で行うことで了承していただいた。

参考文献

茅野市教育委員会 2018 『市内遺跡 12』

本調查

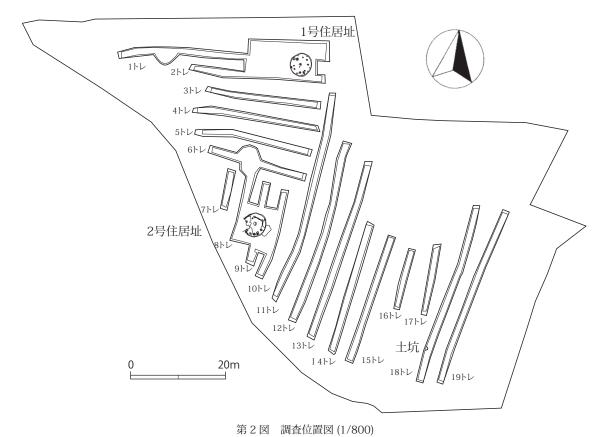
本調査は、年度が変わった平成30年4月2日に開発業者である篠原不動産と発掘調査受託契約を締結し、平成30年4月9日から開始した。まず、試掘調査で検出した縄文時代の住居址を中心に重機により周囲を拡張した後、作業員を導入して平面プランの確認を行った。

その結果、試掘調査において北側で2軒の住居址を検出したとしていたが、住居址2とした掘り込みは、当初から西側が消失しているとしていたが、住居址にはならなかった。そこで、本調査では、試掘調査で住居址3としていた遺構を2号住居址として報告する。

調査は、最近まで山林となっていたところであり、木を伐採した後に伐根されていたが、残された木の根が多く、掘り下げは困難を極めた。また、遺構が想像以上に深く掘り込まれており残りがよく、遺物の出土が多かったこともあって調査に時間を要した。

そこで、遺物の詳細な出土状態の図面は作成せず、各遺物の出土した範囲と高さを記録することで調査期間の 短縮に努めた。

発掘調査は、4月23日まで現地にて行い終了した。遺物の洗浄は調査期間が終了した後直ちに行い、復元作



図版1 辻屋遺跡遠景(西から)

業に入った。遺物の洗浄にあたっては、尖石縄文考古館土器サークルの小平一次、藤森栄子の両名にも参加をいただいた

第3章 遺構と遺物

住居址

1号住居址 (第3・4図、図版3~24)

試掘調査において、最も北側の1号トレンチと2号トレンチの東側で検出した。

掘り下げを開始してみると、壁面から内側に $50 \sim 70$ cm離れた覆土上面から、復元すれば完形になると思われる縄文土器がドーナツ状に多数出土し始めた。土器の出土は著しく、土器塚のごとき様相を示している。それらの土器に混じって軽石製品の碗形 5(図版 21-2)と土偶形 4(図版 21-1)が並んで出土している。碗形のものは火にかかって焼けていた。

住居址中央にいくに従って遺物の出土位置は低くなり、石囲炉周辺ではほぼ床面に密着した状態のものもある。なかには床面で炉址に接したものや焼土上に立てられていたと思われる出土状況を示すものもあった。土偶装飾付とした深鉢 21(表紙、図版 19-3) は南側の一括土器群 $6\cdot7\cdot8(($ 図版 $20-3\cdot5)$ の下位からの出土であり、小型土器は (図版 19-1) は西壁際の床面からの出土である。

このように、遺物の量は非常に多く、一括土器として取り上げた縄文土器は 26 点あったが、整理作業の結果、複数の土器になったものや別の番号のものが接合したものもある。また、番号を付して取り上げたものの、復元に至らなかった土器も多数ある。挿図及び出土状態の写真図版の土器番号は取上番号であり、図版 19 ~ 24 では、



図版 2 辻屋遺跡空中写真

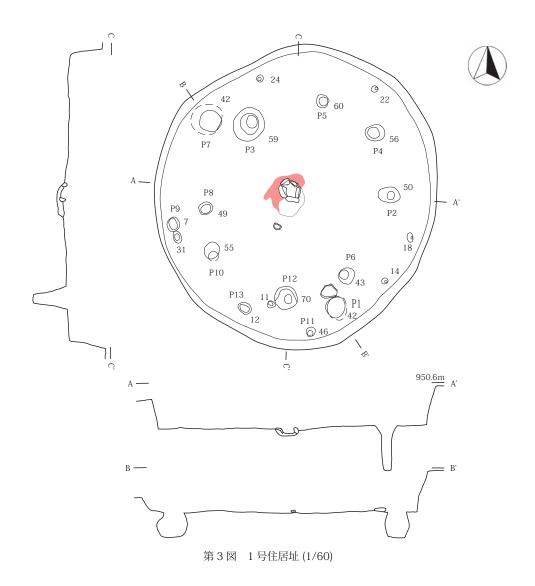
通し番号の後に取上番号を記した。

覆土は、土器が含まれる上層が黒褐色土で、壁際及び出土土器の下から床面までが暗褐色土である。暗褐色土は炉址周辺では薄く、レンズ状に堆積する黒褐色土が厚い。黒褐色土の堆積は炉址内まで認められた。

住居址の規模は南北 4.85 m、東西 4.5 mで、平面形態は、やや南北に長い円形を呈する。遺構の深さは、北向き斜面であることから南側が深く 65cm、北側が 50cmである。床は水平で堅緻である。

炉はほぼ中央にある。炉石を奥壁側に 2 個並べて五角形の形態とした、 $35 \sim 40$ 四程度の小さい石囲炉である。炉石は南・西の 2 個が角のある安山岩で、そのほかは角の丸い扁平礫を用いている。いずれも縦に据えて高さを揃えているが、奥壁側の 2 個は斜めで一段高い。東・西の炉石は上面に平坦面を出しているが、南の炉石は稜のあるもので炉を塞ぐように据えられている。炉内の焼土はかき出されて残っていないが、炉の北側から西側にかけての床面がよく焼けて赤化している。この焼土面に接する炉石の 3 個は、上面から内面がよく焼けて赤化していた。なお、炉址の南側は炉構築時の掘り方とみられる円形の浅いピットで、上面の一部に炉の西側から続く焼土面が広がっていた。

本遺構には多くのピットが検出されている。このうち柱穴と考えられるのは、南側の P12 から時計回りに P10、P8、P3、P5、P4、P2、P6 の 8 本であるが、どれにも貼床等はなく、同時にあったものか、建て替えが 行われたのかは不明である。P12 と P3 がやや大きいが、残りは径 30cm以下で細い。壁際にさらに細くて浅いピットがある。



-5-

P1 と P7 は袋状で住居の内側へ向いており、貯蔵穴になるのであろう。

本遺構の出入り口は、P12 と P6 の間になろうか。

本遺構には、周溝は見られなかった。

本址は、覆土上面の土器に藤内 I 式土器も認められるが、全体として新道式期の住居址と見ることができよう。 出土土器(図版 $19\sim 20$)

1は小型土器で垂下する隆帯を持つ。口径6cm、底径4.1cm、最大幅6.5cmを測る。

2 は深鉢で、頸部より上が遺存している。隆帯により区画され、キャタピラ文が施されている。頚部には縄文が施されている。口径 22cm、最大幅 28cm、残存高 14cmを測る。

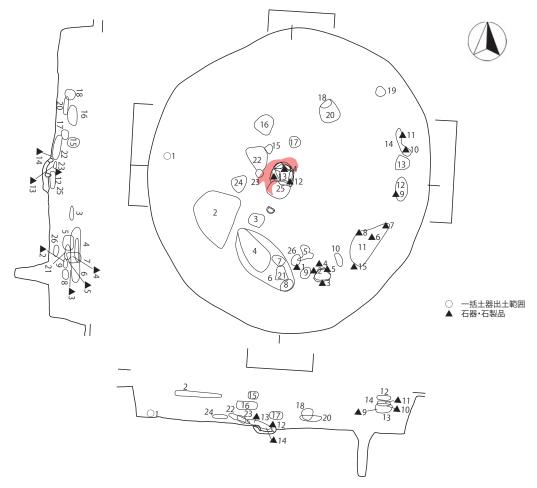
3 は深鉢で、口縁部に土偶装飾を持つ。土偶装飾は口縁部に突出する顔面表現のある頭部である。円柱状の首部の上に扁平な空洞の頭部を載せ、両眼を表わした眼鏡状の粘土紐を貼り付けて顔面を表現している。後頭部に刻みのある円形突起を付け、側頭部の両側には小さな円形突起を付けている。ペン先状の連続刺突文と玉抱き三叉文を多用している。最大高 33.5cm、器高 27.5cm、口径 22.5cm、最大幅 27.5cm、底径 11cmを測る。

4 は深鉢で、口縁部に 1 対の把手をもつ。キャタピラ文やペン先状の連続刺突で区画される。最大高は 30cm、器高 25.5cm、口径 24cm、最大幅 29cm、底径 11.5cmを測る。

5 は深鉢の胴部下半で、ペン先状の連続刺突を施す。最大高 10.5cm、底径 7.3cmを測る。

6 は深鉢で、口縁に 2 対の把手を有する。キャタピラ文やペン先状の刺突を施している。最大高 25cm、器高 21.5cm、口径 22cm、最大幅 26.5cm、底径 9.4cmを測る。

7は深鉢で、口縁に把手を有する。ペン先状の連続刺突で区画されている。胴部及び頚部には縄文が施されて



第4図 1号住居址遺物出土状態 (1/60)



図版 3 1号住居址遺物出土状態(北西から)



図版 4 1号住居址遺物出土状態 (部分)



図版 5 1号住居址遺物出土状態 土器 2~6・9・10 石器・石製品 3~5



図版 6 1 号住居址遺物出土状態 2 土器 2 \sim 4 \cdot 6



図版 7 1 号住居址遺物出土状態 3 土器 3 ~ 6・7・8



図版 8 1 号住居址遺物出土状態 4 土器 1



図版 9 1 号住居址遺物出土状態 5 土器 21・26



図版 10 1 号住居址遺物出土状態 6 土器 20



図版 11 1 号住居址遺物出土状態 7 土器 5・7~10 石器・石製品 2~5



図版 12 1 号住居址遺物出土状態 8 土器 10・11 石器・石製品 6 ~ 8



図版 13 1号住居址遺物出土状態 9 土器 12~14 石器・石製品 10・11



図版 14 1 号住居址遺物出土状態 10 土器 22 ~ 25 石器・石製品 12・13



図版 15 1 号住居址遺物出土状態 11 土器 22・23



図版 16 1 号住居址遺物出土状態 12 土器 15 ~ 18・20・22 ~ 25 石器・石製品 12 ~ 14



図版 17 1号住居址石囲炉址 (西から)



図版 18 1号住居址完掘状態 (南から)

いる。最大高 35cm、器高 32cm、口径 26cm、最大幅 29.5cm、底径 11cmを測る。

- 8 は深鉢の底部で、ペン先状の連続刺突で区画されている。最大高 25.5cm、最大幅 26.5cm、底径 16.5cmを測る。
- 9 は深鉢の底部で、ペン先状の連続刺突で区画されている。 残存高 23.5cm、最大幅 20.5cm、底径 15.4cmを測る。
- 10 は深鉢で、体部に輪積痕を残す。器高 16.5cm、最大幅 16cm、底径 7.4cmを測る。
- 11 は深鉢で、口縁部に 1 対の環状の把手を有するが、非対象である。体部の輪積痕に、指頭による圧痕を残す。 最大高 32cm、器高 29.5cm、口径 24.5cm、底径 15cmを測る。
- 12 は深鉢の底部で、表面の剥落が激しいが、垂下する隆帯に指頭による圧痕が認められる。残存高 24cm、最大幅 24cm、底径 14cmを測る。
 - 13 は深鉢で、胴部下半を欠く。胴部に輪積痕を残す。口径 20.5cm、残存高 20cmを測る。
- 14 は膨らみのある口縁部が 7 単位の波状をなす深鉢で、体部に一対の抽象文を施している。左向きの抽象文は頭部の文様が星形に構成されている。最大高 45cm、口径 31.5cm、最大幅 33cm、底径 15.5cmを測る。
- 15 は平縁の深鉢で、体部に一対の抽象文を施している。右向きの抽象文は頭部の文様が三つ指状に構成されている。器高 38cm、口径 27.5cm、底径 14.5cmを測る。
 - 16 は深鉢で、底部を欠く。体部全体に縄文を施している。残存高 22cm、口径 17.5cmを測る。
- 17 は波状口縁の深鉢で、4 単位の突起がある。体部には縄文が施されている。残存高 35cm、口径 30cm、最大幅 32cmを測る。
 - 18 は深鉢の胴部下半で、平出3A系の土器である。最大高18.5cm、底径8.8cmを測る。
 - 19 は深鉢形土器で、焼町系の土器である。器高 33cm、口径 26.7cm、底径 11.5cmを測る。

出土石器·石製品 (図版 21 ~ 24)

- 出土石器・石製品は図示したもののほかは打製石斧片 6、黒曜石 453 個・重量 1136.2 g、打製石器製作時の 緑色岩等の砕片 54 である。
- 1 は土偶形の軽石製品で、体部のみである。へそ部分にくぼみがみられる。高さ 4.2cm、幅 3.5cm、厚さ 1.1cm を測る。
- 2 は碗形の軽石製品である。径 5.5cm、高さ 3.3cm、くぼみの内径 3.5cm、深さ 2.5cmを測る。表面の片側が焼けて黒色を呈している。
 - 3・4 は石匙である。
 - 5は横刃形石器である。
 - 6 は磨製石斧で刃部及び基部を欠く。
 - 7~29は打製石斧で破損品も多い。
 - 30 は磨石の欠損品になると思われる。
 - 31~40は凹石である。
 - $41 \sim 52$ は石鏃で、すべて黒曜石製である。 $49 \sim 52$ は未製品とその破損品のように思われる。



図版 19 1号住居址出土土器 (1)



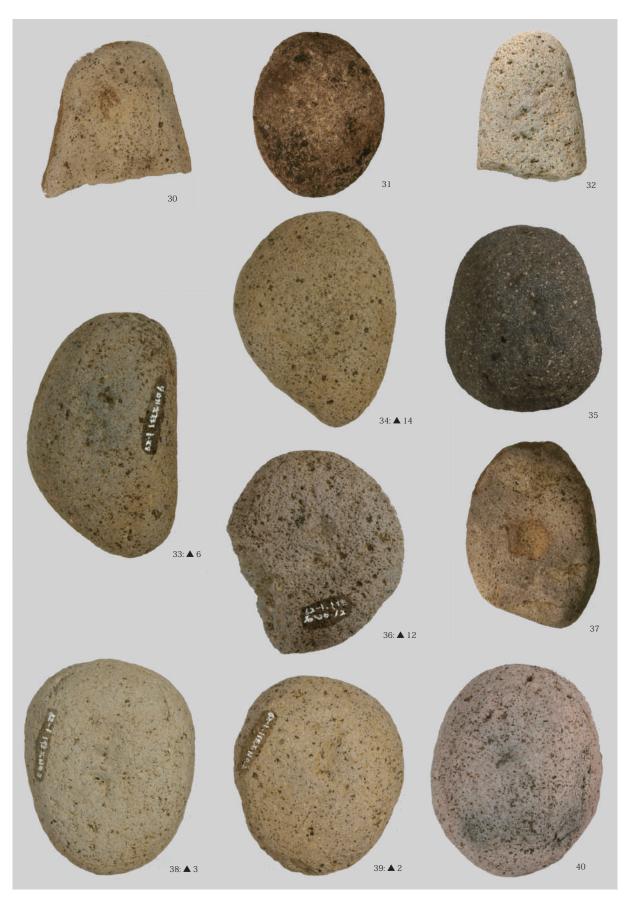
図版 20 1 号住居址出土土器 (2)



図版 21 1 号住居址出土石器 (1) (1・2 は約 1/1、他は約 1/2)



図版 22 1 号住居址出土石器 (2)(約 1/2)



図版 23 1号住居址出土石器 (3)(約 1/2)



図版 24 1 号住居址出土石器 (4)(約 1/1)

2号住居址 (第5図、図版25~31)

試掘調査の際、9号トレンチで検出した。住居址の規模は、西が地形の傾斜と伐根による撹乱で不明であるが、 径 5.2m ほどの円形を呈すると考えられる。深さは最も残りの良い東壁側で 50cmある。

床は炉址の東側では水平で堅いが、西側は地形に沿って傾斜しており、明確な床は失われている。遺存状態が 良好な北から東側にかけての床は壁際が幾らか高い。

炉は中央のやや北寄りにある。拳大の安山岩の角礫を斜めに据えた石囲炉であるが、東側に一部残るのみで他 は抜き取られている。上面に焚口の炉石と思われる厚い一枚石が割れて遺存していた。炉底に径 20cmほどのよ く焼けた焼土が残っている。

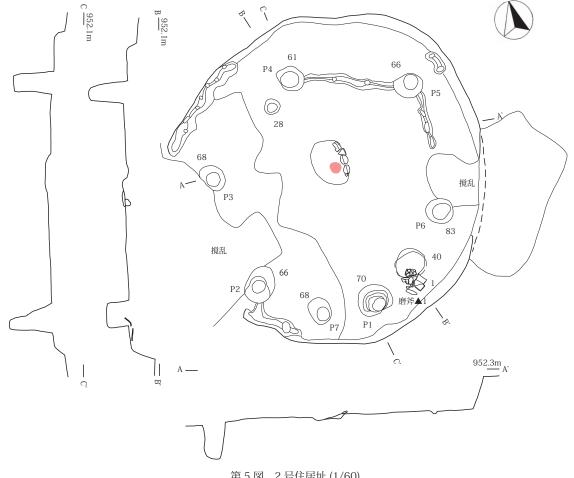
主柱穴は6本で、P7は出入口の柱穴であろう。P1には中段が付いている。北側のP4とP5の間には浅 い間仕切り溝が設けられている。間仕切り溝は東側のP5とP6の間にも検出されているが、撹乱によって途切 れた状態である。

床面の施設では、南東の壁際に袋状のピットがある。底の平らな内向きの開口であり、貯蔵穴であろう。狢沢 式と平出 3A の一括土器の 3 個体分が床面の高さで覆いかぶさっており、脇に完形の磨製石斧が残されていた。

周溝は壁の浅い西側に部分的に認められる。

遺物は住居中央の炉址上を中心に床面上 10cm前後の位置で数個体分の一括土器 (図版 30-1 ~ 3)と、磨製石斧 (図版 31-2) が出土しているほか、袋状ピット脇の床面から一括土器 (図版 30-4・5) と長さ 18.5cmの完形の乳棒 状磨製石斧(図版 31-1)が出土している。2は底部に1号住居址出土の破片が接合している。石器は打製石斧1、 磨製石斧 2、凹石 1、黒曜石 17 個・重量 78.5 gである。

本址は、袋状ピット脇床面の3個体の一括土器から狢沢式期の住居址と見ることができよう。



第5図 2号住居址 (1/60)



図版 25 2 号住居址完掘状態 (南西から)



図版 26 2 号住居址遺物出土状態 (1)



図版 27 2 号住居址遺物出土状態 (2) 石囲炉周辺出土土器



図版 28 2 号住居址遺物出土状態 (3) 石囲炉周辺出土土器



図版 29 2 号住居址遺物出土状態 (4) 袋状ピット脇 (図版 30-4・5、図版 31-1)



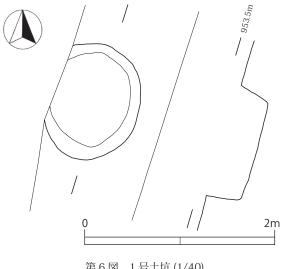
図版 30 2 号住居址出土土器



図版 31 2 号住居址出土石器 (1/2)

土坑

1号土坑 (第6図、図版 32) 18号トレンチの南側で検出された。試掘調査報文『市内遺跡 12』(2018)のものを再掲する。頂部に近く、調査区北側の道路とは 3.5 mほどの比高差がある。平面形態は長径 125cm、短径 105cmの長円形で、底面の形態もほぼ同じである。断面形態はタライ状で、深さ 36cmを測る。覆土は暗褐色土で、5mm以下のロームブロックを含み、締まっているが粘性はない。遺物の出土はなく、時期は不明である。



第6図 1号土坑 (1/40) 図版 32 1号土坑 (東から)



図版 33 遺構外出土石器 (1/2)

遺構外出土石器 (図版 33)

1・4・5 は昨年度の試掘の際に表採したもの及び周辺から表採したもので、『市内遺跡 12』に掲載したものを 再掲した。1 は黒曜石の石核である。2・3 は打製石斧。4 は磨石。5 は特殊磨石である。5 の様な、今回調査で 検出した縄文時代中期ではないと考えられる遺物は、他に縄文時代前期末の諸磯 C 式土器の破片などがある。

第4章 まとめ

今回の発掘で注目されるは、1 号住居址での土器を中心とする遺物の出土状態である。これは住居への単なる遺物の廃棄とは思えない出土状態であり、調査時の所見を基に若干の検討を加えたい。

遺物は炉址を中心に、全体として住居址の中央から東と南側へ寄った位置に検出されている。それらの空間から離れた北壁から西壁側にかけては、西壁下に小型土器が1点出土しているだけである。中央の炉址は焼土がなく、周辺の床が焼けている。炉址脇には一括土器が数点あり、なかでも25は炉址に接して床面の焼土上に立てられていたと思われる状態を示している。同じような床面近くの土器はいずれも炉址周辺の土器で、東壁から南壁に沿う土器群と出土状態を異にしている。しかもそれらは新道式期の土器であり、出土土器の中では古相の土器である。これに対し、東壁から南壁に沿う土器群は、床面より高い位置で暗褐色土上面から黒褐色土中に遺存している。それらの土器群は東壁から南壁側が新道式の土器で、南西壁側が主に新相の藤内I式土器である。新道式期の土器が多い東壁から南壁側の土器群には軽石製品や石器が伴っている。なかでも軽石製品は、土偶形など何かを象った模造品とみられるものが多々あることで儀礼具と考えられており、儀礼的行為の痕跡を示す住居址の覆土から出土することが知られている。

以上のような遺物の出土状態からは次のようなことが復元的に考えられる。まず、炉内の焼土を掻き出して周囲で土器を立てて火を焚く行為と、北から西側の壁寄りの空間で小型土器を伴う行為が行われる。次に住居を覆うように全周から暗褐色土がかけられる。この場合、地形が低いにも関わらず、北から西側の空間が広く覆われる。続いて東から南側にかけて土器や軽石製品による儀礼的行為を伴いながら住居全体を黒褐色土で覆う。その後、埋め土が落ち着いていくらか窪地化した段階でも、南側から土器の投入を伴う儀礼的行為が藤内 I 式期まで継続的に行われた。

さて、今回の試掘調査開始前に、近くにお住まいの宮坂今朝芳氏より、黒曜石の石核など数点が採集されて文化財課に届けられた。中には道を挟んだ北側の造成された場所のものもある。また、調査中に、道路北側の現在カラマツ林となっている土地の所有者から、ここからもかつて遺物が採集できたとの情報が寄せられている。

試掘調査開始前に辻屋遺跡を訪れた際には、縄文早期の特殊磨石と縄文前期の諸磯 C 式土器の破片を採集した。しかし、試掘調査や今回の調査では、当該期の遺構や遺物の出土はなかった。また、そのことと関連し、今回発掘した新道式期の 1 号住居址の覆土からは藤内 I 式土器が出土しており、前述の寄せられた情報からして藤内式期以降の住居址が道路北側に埋蔵されている可能性は高いであろう。また、今回の発掘区では中期後半の遺物がまったく見られない。山口沢川までの地形の広がりを考慮して遺跡の主体部が道路北側にあるとしても、辻屋遺跡はおそらく中期前半の集落遺跡であろう。その場合に重要になってくるのが南東約 500 mに位置する中期後半の新井下遺跡との関係であり、今後の調査をまってさらに検討を加えたい。

いずれにしても、今回の発掘調査で縄文中期の芸術性豊かな優れた土器を多く出土する辻屋遺跡の性格が明らかになった意義は大きい。前述した縄文早期や前期の遺物に伴う遺構の広がりなども含め、道路北側を中心とする周辺地について注視していきたい。

参考文献 鵜飼幸雄「八ヶ岳山麓における縄文中期の軽石製品」(1994、『中部高地の考古学』 IV、長野県考古学会)

報告書抄録

ふりがな	つじやいせき										
書 名	辻屋遺跡										
副書名	平成30年度 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
巻 次											
シリーズ名											
シリーズ番号											
編著者名	小林深志•鵜飼幸雄										
編集機関	茅野市教育委員会										
所 在 地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 №0266-72-2101										
発行年月日	西暦2019年3月26日										
ふりがな	ふりがな 所 在 地	コード		北緯。,,	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	· / //	0 / //	啊 且 別 目	(m²)	刚业水囚			
つじや	ちのしこひがし			36°	138°	2019.4.9		는 내가는 그 사건 작사			
辻屋	茅野市湖東	20214	62	01" 46'	12' 30"	} 2019.4.23	200 m²	宅地造成に伴う発掘調査			

所収遺跡名	種別 主な時代 主		主な遺構	主な遺物	特記事項			
つじや 辻屋	集落	縄文時代	住居址 2軒	縄文土器 石器 石製品	・縄文時代の住居址からは、多くの縄文土器・石器・石製品が出土した。			
要約	これまで実態の明らかでなかった遺跡であり、新井下遺跡や中ッ原遺跡といった大集落に近接する小規模な遺跡であるが、縄文土器などの遺物の出土は多く、大きな成果を得た。							

辻屋遺跡

- 平成 30 年度 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 31 年 3 月 25 日 印刷 平成 31 年 3 月 26 日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 長野県茅野市塚原二丁目6番1号(0266)72-2101(代)

印刷 永明社印刷所

長野県茅野市塚原2丁目12番30号